

解答

一

- 問一 ア 垂〔れ〕 イ 景色 ウ 勢〔い〕 エ 不意 オ 異常
カ 疑〔い〕 キ 見当 ク 備〔えて〕 ケ 囲〔つて〕 コ 背広
- 問二 イ
- 問三 A ア B エ
- 問四 ア
- 問五 いかだのしゃっくりの原因は、帆が大きすぎることと、いかだのへさが低いことであり、帆をもう少し小さくし、へさきの側面に幅広の板で囲って波よけにすればよいと考えている。（84字）
- 問六 エ
- 問七 自分が考えた工夫でいかだのしゃっくりをなおせるかどうかわからないし、急に決まった父親の転勤に伴う引っ越しに対して、自分ではどうしようもない投げやりな気持ちを持っている。
- 問八 いつも明るく快活で、様々な困難があってもめげることなく前向きであり、友人たちへの心づかいも忘れないリーダー的存在である。（60字）
- 問九 引っ越しを何度も繰り返してきたので、自分の「生まれ故郷」がわからなくなり、また友人関係も希薄になり、これから先も今の状態が続くのかと思うと、ゆううつな気持ちになっている。
- 問十 自分が転校する前に、いかだで航海ができるように氣遣ってくれる嗣郎の気持ちに感謝し、その気持ちに応えて航海に出ようと決意している。
- 問十一 僕がテニスを始めたのは、小学3年生の頃でした。当時のテニススクールには、小学生だけでも100人以上の会員があり、中には、全国大会に出場する小学生もいました。僕は走るのが速かったものの、テニスのボールをラケットにうまく当てることができませんでした。そんな時、同じ3年生からテニスを始めた田中健一君と出会いました。お互いのフォームを確認するためにプレーするところを撮影したり、球出しをしたりしました。ダブルスも一緒に組むことになりました。まだまだ上手とはいえませんが、気心の知れた田中君と一緒に頑張れば、もっと上手になれるような気がして、今も頑張っています。

解説

一

- 問五 傍線②に続く場面に原因と対策がはっきりと書かれています。一つ目は、帆が大きすぎて風が強く当たりすぎるので、帆を少し小さくすればよいのではないか。二つ目は、へさが低く沈むので、へさきの側面を幅広の板で囲ってみたらどうだろうと考えています。
- 問六 傍線③の場面では、最初、嗣郎との会話が始まっています。嗣郎との会話では、あと数日で引っ越さなければならぬ辛さとシーホース三世号がともに走るかを見届けたい思いを、勇は「力なくいつ」ています。そこに、沖に浮かんでいるシーホース三世号を見ていた邦俊が岸に上がってきました。そのとたん、勇はがらりと変わって、邦俊に明るい声で呼び掛けているのですね。
- 問七 傍線④に続く勇の言葉に「わかるもんか、うまくいくかどうか」とあります。勇は、すぐに引っ越さなければならぬ苛立ちといかだの完成を見られないかもしれない不安から、少し投げやりな言い方をしています。
- 問九 登場人物の心情をそれとなく暗示している情景描写の問題です。「入道雲がおおいかぶさるように中天高くわきあがっている」のですから、いまにも雨が降り出しそうな情景です。傍線⑥の前には、生まれて2か月で引っ越してしまったので「生まれ故郷」という言葉がみょうにひっかかるようになり、また、過去の記憶もこんがらがっています。さらに傍線⑥の後ろには、希薄な友人関係のことが書かれており、友人も学校も、自分が生きていることさえもなんともつまらなく思うようになっています。
- 問十 勇は、板ぎれをかかえて立っている嗣郎をみて、それまでのじめった気分がきえさり、陽気な子供に戻っています。そして、その嗣郎の気持ちに応えて、航海に出ようと決意しています。